



久しぶりに御茶ノ水駅に降りてみた。特別

の用事があったわけではないが、N先生とお会いすることになって夕方までまだ時間がかかりあったからである。この御茶ノ水は私が初めて知った東京のひとつであり、高校時代を過ごした埼玉県の浦和（現在は大宮市、与野市と合併してさいたま市になっている）から、京浜東北線に乗って、秋葉原で総武線に乗り換えて、この御茶ノ水によく来たものである。国鉄からJR東日本に経営が移ってからまもなくして、御茶ノ水駅の建て替え計

東京散歩に思う この国の有り様

情報広報部 橋本洋一

画が公示されていたが、バブル崩壊のためか知らないうちに、建て替え計画が立ち消えになってしまったようだ。東京医科大学の新しい校舎と私の間に激んだ色をした神田川が流れている。この神田川の風景は初めてお茶の水に来た時とまったく変わっていない。高校時代の2年間、週に1回は通い、そして予備校時代をこのお茶の水で過ごした。まさに私の東京での青春時代を過ごした街である。ガロの「学生街の喫茶店」やあべ静江の「コーヒーショップで」を思い起こす学生の街でも

ある。

水道橋寄りの西口に出ると、明大通り向かいの交番脇に《お茶の水》由来の碑がある。ぼつとしていると気がつかないで通り過ぎてしまいかもしれない。神田川を越えた（東京医科大学および附属病院のならびにある）順天堂医院のあたりにあった寺の境内に名水がわき、これを將軍に献上したことからの名水である。《お茶の水》と呼ばれることになったらしい。將軍家御用達の名水というのだから、よほどの名水であったにちがいないが、現在の日本

名水百選に入っている

とは聞いたことがないので、残念ながら枯渇してしまったのかも

れない。《お茶の水》は名だけが残った形ではあるが、その当時の名水を偲び、自然環境を取り戻そうと言った気持ちを引き起こす起爆剤にでもなれば良いと思うのだが。激んだ神田川をみていると、そういった希望的観測も一瞬にして吹っ飛んでしまう気がするのである。

交番の脇を行くかえで通りは、予備校時代よく通った通りである。このかえで通りと平行に走る駿河台下の一本下がった道がとちの木通りで、その『とちの木』は20メートル以

上の樹高となり、七葉の葉を茂らせ、樹上に花を初夏にはつけるらしいが、高いところに咲くために気づかれることが少ないようである。この通りには1921年創立の名門文化学院がある。麹町に住居があった作家有島武郎も講師陣の一人であったらしい。とちの木通りをさらに足を進めると、男坂、女坂に出合う。男坂は踊り場がひとつで、直線的で一気に上下する階段であるのに対して、女坂は途中二カ所の踊り場で屈曲して降りていく階段になっている。

第44代アメリカ合衆国大統領に、初の黒人候補であるオバマ上院議員が大差で当選を果たした。アメリカ合衆国国民は改革を選んだ。選挙を控えたわが日本国政府もようやく医師不足を認め、医学生の定員をかつての最大数に戻した。男坂ではないが、直線的なその場しのぎの政策の羅列で国家の医療政策が施行される時代はそろそろ終焉の時期を迎えなければならぬだろう。与野党問わず、選挙目当ての空虚な政策論議を超えた真摯な論議を国民は期待している。

「参考文献」：「TOKYO 老舗・古町・お忍び散歩」 坂崎重盛 朝日新聞社発行